

日本獣医生命科学大学附属博物館年報

2024（令和 6）年度



日本獣医生命科学大学
Nippon Veterinary and
Life Science University Museum 附属博物館

巻頭言

本年報は2020年2月に第3号を刊行して以来のものとなります。この間6年近いブランクが空きましたが、その大きな理由としては、COVID-19感染拡大防止のため2020年2月29日から2022年7月まで休館せざるを得なかったことが挙げられます。

しかし、休館中当館の活動が完全に停止していたわけではなく、むしろ当館をめぐる重要な出来事が相次ぎました。まず、2020年4月3日に当館の活動拠点である一号棟が国の登録有形文化財となりました。しかし、一号棟は以前より老朽化が進み、耐震面での問題が指摘されていたため、同年6月から2022年2月まで耐震化などの整備工事が実施され、その過程で様々な発見がありました。

また、休館中の2022年4月には「博物館法の一部を改正する法律」が成立し、博物館に法的な位置付けを与える登録制度の対象が大幅に拡大され、国と独立行政法人を除く、あらゆる法人が設置する博物館が登録を受けることができるようになりました。しかも、登録審査基準も見直され、開館日数など外形的な要素にとどまらず、活動の実質的な要素についても確認されることとなりました。

当館も新しい登録制度へ移行することを契機に、開館当時の名称「日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアム」を、2023年4月から「日本獣医生命科学大学付属博物館」に改称し、「本学の歴史と獣医・畜産・生命科学の総合博物館」を新たなコンセプトに掲げて活動を続けることになりました。

その後通常の展示活動等に加えて登録に向けた諸準備を進め、2025年3月31日晴れて武蔵野市内の博物館では初めて、登録博物館として認定されるに至りました。

本年報は2024年度の活動を中心に取りまとめたものではありませんが、以上の経緯から第3号刊行後の様々な出来事についても、当館の歴史の記録として掲載していることにご理解を賜りたいと存じます。

これからも社会に開かれた大学を実現するとともに、登録博物館としての責務を全うすべく、当館の活動を充実させてゆく所存です。今後とも当館へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、本年報編集中の2025年7月1日、前館長で長らく当館の発展にご尽力いただいた羽山伸一教授が御逝去されました。この場を借りて生前の御貢献に感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りします。

2026年（令和8年）3月

日本獣医生命科学大学付属博物館
館長 神代 浩

目次

巻頭言	3
 I. 事業報告	
1. 展示活動	5
2. 教育普及活動	6
3. 資料の収集・管理・活用	8
4. その他	9
 II. 統計・一覧・資料	
1. 開館状況	10
 III. 博物館の概要	
1. 組織と職員	12
2. 博物館関連規定	12
 IV. 記録	
1. 2022 年度企画展「獣医学教育用掛図展～獣医解剖学の系譜と本学の教育～」	20
2. 第 1 回企画展「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」	26
3. <第 1 回企画展開催記念>キリン講話会開催	31
 V. 研究	
1. 茨城県神栖市におけるカンムリウミスズメ (<i>Synthliboramphus wumizusume</i>) 幼鳥の 漂着記録	38

※ 本資料の I ～ III の内容は、2025 年 3 月 31 日時点の情報をまとめたものです

I. 事業報告

1. 展示活動

2024 年度は館内の 3 部屋（自然系展示室・歴史系展示室・定期交換展示室）および E 棟のエントランスホールにて展示を行った。

[1] 常設展

① 自然系展示室

当館が所蔵する野生動物の剥製や骨格標本などを展示している。多くの剥製はケースに入れない「露出展示」の状態で開催されているため、野生動物の姿を間近に感じることができる。

② 歴史系展示室

本学が「私立獣医学校」として誕生してから現在に至るまでの歴史を、当館所蔵の資料や写真などを用いて紹介している。

[2] 企画展・特別展

① 第 1 回企画展「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」

- 会期：2023 年 11 月 3 日～2024 年 6 月 21 日
※2023 年 8 月 19 日と 20 日にプレオープンを実施
※2024 年 5 月末の終了を予定していたが、好評につき会期延長
- 会場：自然系展示室
- 主催：日本獣医生命科学大学附属博物館
- 会期中入館者数：3,784 名（プレオープン日を含む）
- 内容：博物館の名称変更後 1 回目となる企画展として、キリン「長次郎」に関連した企画展を開催した。（詳細は 26 ページ参照）

② 第 1 回特別展「NVLU 奄美プロジェクト -研究・保全・そして未来-」

- 会期：2024 年 11 月 1 日～2025 年 5 月 31 日
- 会場：自然系展示室
- 主催：日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科応用部門 病態病理学研究分野（企画：鈴木遼太郎、吉村久志、山本昌美）・日本獣医生命科学大学附属博物館
- 会期中入館者数：1,697 名（2025 年 3 月 31 日時点）
- 内容：東京から南西に約 1300 km 離れた奄美大島は、南の島というイメージとは裏腹に、険しい山が連なる「森の島」である。この森には、地球上の他の地域では見られない固有種が多く生息しているが、奄美大島の固有種たちは人間のもたらした様々な脅威にさらされている。本学獣医学部の 2 つの研究室（獣医保健看護学科応用部門病態病理学研究分野および獣医学科獣医寄生虫学研究室）が中心となり進められた研究の結果、外来種のネコやネズミが持ち込んだ感染症が、固有種の健康に悪影響を及ぼしていることが解明されてきた。本特別展では、これまでの研究成果を交え、奄美大

島の野生動物を保全するためにどのような対策が必要かを考えていく。

[3] その他の展示

① ミニ展示「博物館活動日誌 vol.1 一号棟が国の登録有形文化財になりました」

- ・ 会期：2022 年 10 月 5 日～現在（終了時期未定）
- ・ 会場：定期交換展示室
- ・ 内容：一号棟の文化財登録について解説した。

② ミニ展示「博物館活動日誌 vol.2 一号棟の整備工事を実施しました」

- ・ 会期：2022 年 10 月 5 日～現在（終了時期未定）
- ・ 会場：定期交換展示室
- ・ 内容：一号棟の整備工事について解説した。

③ ミニ展示「おしえて！コウノトリ～日獣大にコウノトリがやってきた～」

（関東エコロジカル・ネットワーク推進協議会との連携展示）

- ・ 会期：2024 年 2 月 29 日～2024 年 5 月 31 日
- ・ 会場：定期交換展示室
- ・ 内容：関東エコロジカル・ネットワーク推進協議会の活動を紹介するとともに、当館が新たに作成したコウノトリの剥製を展示した。

④ ミニ展示「絶滅危惧種展 2024」

- ・ 会期：2024 年 8 月 17 日～2024 年 10 月 6 日
- ・ 会場：自然系展示室
- ・ 内容：当館および本学獣医保健看護学科病態病理学研究分野が所蔵する絶滅危惧種の標本を展示した。

2. 教育普及活動

[1] 学内対応

① 学芸員課程

本学では獣医学部獣医保健看護学科と応用生命科学部動物科学科にて学芸員課程を開講している。2024 年度は 86 名（2 年生 27 名/ 3 年生 23 名/ 4 年生 36 名）の学生が学芸員課程を履修した。

- ・ 学内実習：見学実習
2 年生および 3 年生による見学実習を受け入れた。
- ・ 学内実習：実務実習
4 年生を対象とした実務実習に協力した。
- ・ その他
博物館資料論および博物館教育論において博物館の展示室が活用された。

② その他

- ・ 実習での利用
動物形態学実習（獣医学部獣医保健看護学科 1 年次）において展示室が活用された。

[2] 学外対応・社会連携

① 特別解説の実施

要望があった学外の団体を対象に特別解説を実施した。

〈主な対応〉

- ・ 武蔵野市立境南小学校による博物館見学への対応
日時：2024 年 9 月 27 日
人数：32 名（2 年 1 クラス）
- ・ 武蔵野市立境南小学校による大学見学への対応
日時：2024 年 10 月 18 日
人数：10 名（2 年 1 班）
- ・ 「【武蔵境駅開業 135 周年記念企画】駅員と歩く！武蔵境の歴史探索ツアー」への対応
日時：2024 年 11 月 23 日
人数：28 名
- ・ 武蔵野市立境南小学校による大学見学への対応
日時：2025 年 1 月 10 日
人数：31 名（2 年 1 クラス）

② その他

〈主な対応〉

- ・ 放課後等デイサービス ウイング調布による博物館見学への対応
日時：2024 年 7 月 13 日
人数：15 名
- ・ 放課後等デイサービス ウイング稲城による博物館見学への対応
日時：2024 年 8 月 6 日・14 日・22 日
人数：11 名（6 日）・12 名（14 日）・12 名（22 日）
備考：要望を受け特例的に駐車場の利用を許可した

※ ①②を含め、2024 年度に受け入れた団体の一覧は 10 ページに記載した

[3] 講座・イベント

① 企画展開催記念イベント「キリン講話会」

- ・ 日時：2024 年 4 月 13 日 13:30～16:30
- ・ 会場：日本獣医生命科学大学 E 棟 111 講義室
- ・ 主催：日本獣医生命科学大学附属博物館
- ・ 共催：日本獣医生命科学大学 同窓会・日本獣医生命科学大学 後援会
- ・ 後援：（公財）東京動物園協会（上野動物園・多摩動物公園・井の頭自然文化園）・武蔵野市教育委員会・三鷹ネットワーク大学推進機構・国立科学博物館
- ・ 参加者：247 名（関係者含む）
- ・ 参加費：無料

- 概要：企画展「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」の開催を記念して実施した。（詳細は 31 ページ参照）

3. 資料の収集・管理・活用

[1] 資料の収集

① 寄贈資料

- ヒョウ毛皮標本：1 点
- ツシマヤマネコのマフラー（毛皮標本）：1 点
- 書籍・雑誌・その他：615 点

② 移管資料

- 有形登録文化財（建造物）旧東京市麻布区役所庁舎（日本獣医生命科学大学一号棟）調査報告書：1 点
- 有形登録文化財（建造物）旧東京市麻布区役所庁舎（日本獣医生命科学大学一号棟）工事報告書：1 点
- キリン長次郎骨格標本：1 点
- スナメリ骨格標本：1 点
- 馬解剖模型：1 点

[2] 資料の管理

① 新規登録資料：158 点

◎ 参考：過去 3 年間の収蔵資料数の推移（単位：点）

		2022 年度	2023 年度	2024 年度
自然史系	剥製	72	885	88
	骨格	48	51	51
	昆虫	472	472	472
	その他	34	338	45
	合計	626	646	656
歴史系	掛図	120	121	143
	機器	45	49	49
	図書	776	239	343
	書類	151	151	151
	写真	44	47	47
	その他	339	125	147
	合計	475	732	880
総数		1,101	1,378	1,536

[3] 資料の活用

① デジタルデータ化

- ・ 北里研究所関連資料（梅野早苗による手書きの作業簿）：3 点

② 資料の貸出

2024 年度は該当なし。

4. その他

[1] 広報活動・情報発信

① 取材対応・原稿執筆・校正（主要なもののみ抜粋）

- ・ 『時を越え 君の名は「長次郎」』（2024 年 5 月 30 日朝日新聞朝刊）（朝日新聞社）
- ・ 『大学報 第 79 号（連載記事：博物館活動日誌）』
- ・ 『医歯薬学系博物館辞典（改訂版）』（雄山閣）
- ・ 『新訂 大学博物館事典—市民に開かれた知とアートのミュージアム—』（日外アソシエーツ）
- ・ 『ミュージアム多摩 第 46 号』（三多摩公立博物館協議会）
- ・ 『大学報 第 80 号（連載記事：博物館活動日誌）』
- ・ 『散歩の達人 2025 年 2 月号』（交通新聞社）

② オンライン発信

- ・ 日本獣医生命科学大学公式サイト 博物館ページの公開
- ・ Facebook での情報発信

[2] グッズ販売

- ① 小冊子：日本獣医生命科学大学一号棟（販売価格：1 冊 500 円）
- ② 絵葉書（全 5 種）（販売価格：1 枚 100 円）

Ⅱ．統計・一覧・資料

1. 開館状況

[1] 基本情報

① 開館日時

火曜日～土曜日 10：30～17：00（最終入館および物販は 16：30 まで）

② 休館日

日曜日・月曜日・祝日、年末年始、大学の定める休日（その他臨時休館あり）

③ 入館料

無料

④ 入館方法

事前予約制

[2] 開館記録

① 月別開館日数

（単位：日）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	20	21	19	18	22	15	20	17	19	13	12	18	214

[3] 入館記録

① 月別入館者数

（単位：人）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
学内	56	59	35	13	21	19	17	139	31	20	3	11	424
学外	335	320	120	812	1,080	63	222	1,138	15	55	65	220	4,445
計	391	379	155	825	1,101	82	239	1,277	46	75	68	231	4,869

※ 学内：本学関係者（教職員、学生 等）による見学（授業・実習等を目的とした来館を含む）

※ 学外：本学関係者以外の者による見学（特別開館時の来館や団体見学での来館を含む）

② 団体一覧

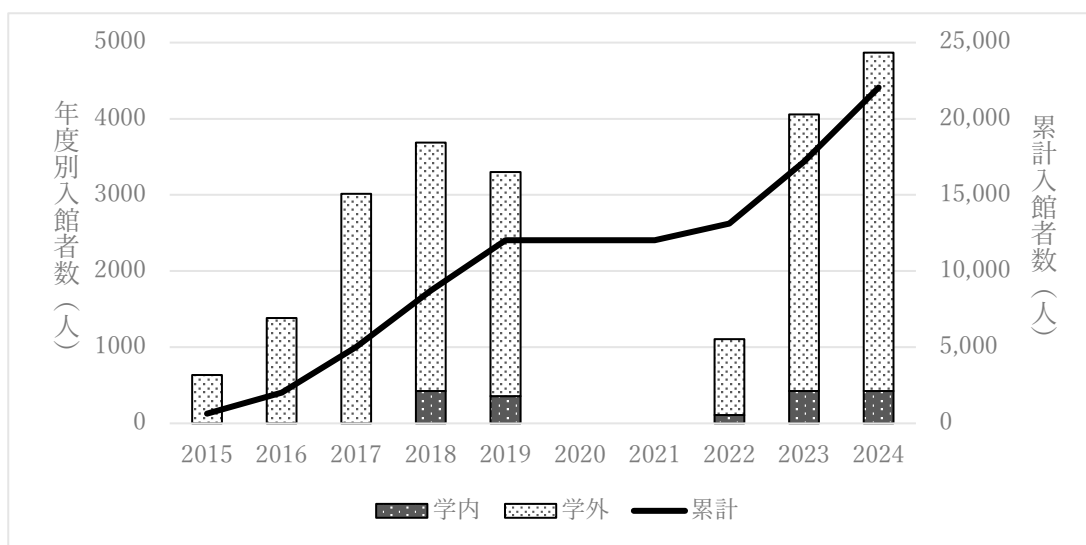
- 2024 年 4 月 30 日：習志野市立習志野高校（2 名）
- 2024 年 7 月 12 日：都立小川高校（3 名）
- 2024 年 7 月 13 日：放課後等デイサービス ウイング調布（15 名）
- 2024 年 8 月 6 日：放課後等デイサービス ウイング稲城（11 名）
- 2024 年 8 月 14 日：放課後等デイサービス ウイング稲城（12 名）
- 2024 年 8 月 22 日：放課後等デイサービス ウイング稲城（12 名）
- 2024 年 9 月 27 日：境南小学校（2 年生 1 クラス）（32 名）
- 2024 年 10 月 18 日：境南小学校（2 年生 1 班）（10 名）
- 2024 年 10 月 25 日：都立八丈高校（3 名）

- 2024 年 11 月 14 日：足立学園中学校（5 名）
 - 2024 年 11 月 23 日：
 - 【武蔵境駅開業 135 周年記念企画】駅員と歩く！武蔵境の歴史探索ツアー（28 名）
 - 2025 年 1 月 10 日：境南小学校（2 年生 1 クラス）（31 名）
- ※ 団体の人数には引率者（団体関係者、本学関係者 等）の数も含まれている
- ※ 団体対応（スタッフによる展示解説）は原則 10 名以上を対象としているが、大学からの依頼があった場合などは特例的に少人数での団体見学を受け入れた

◎ 参考：開館時からの入館者数の推移

（単位：人）

年度 区分	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
学内	-	-	-	424	357	0	0	109	425	424
学外	637	1,382	3,013	3,262	2,944	0	0	996	3,632	4,445
合計	637	1,382	3,013	3,686	3,301	0	0	1,105	4,057	4,869
累計	637	2,019	5,032	8,718	12,019	12,019	12,019	13,124	17,181	22,050



- ※ 2015 年度から 2017 年度までは学内と学外を区別していなかった
（便宜上、グラフでは「学外」として集計）
- ※ 2019 年度：2020 年 2 月 29 日より臨時休館（COVID-19 感染拡大防止）
- ※ 2020 年度：通年休館（COVID-19 感染拡大防止、建物工事）
- ※ 2021 年度：通年休館（建物工事、展示準備）
- ※ 2022 年度：2022 年 8 月プレオープン、10 月見学受付再開（団体見学は受け入れ停止）
- ※ 2023 年度：2023 年 4 月より団体受け入れ再開、12 月～1 月のみ団体見学受け入れ一時停止

Ⅲ. 博物館の概要

1. 組織と職員

[1] 職員

職名	氏名	担当分類
館長	羽山 伸一	総括
副館長	太田 能之	館長補佐
事務室長	勝山 智也	事務
アシスタント・スタッフ（学芸員）	石井 奈穂美	学芸業務全般
パート事務員（学芸員）	廣瀬 光子	資料管理

[2] 運営委員

役職	氏名	所属
委員長	羽山 伸一	野生動物学研究室（教授）
委員	和田 新平	水族医学研究室（教授）
委員	佐々木 典康	獣医生化学研究室（准教授）
委員	山本 昌美	獣医保健看護学応用部門 病態病理学研究分野（准教授）
委員	太田 能之	動物生産化学教室（教授）
委員	小林 優多郎	食品化学教室（講師）
委員	山本 俊昭	獣医保健看護学応用部門 保全生物学研究分野（教授）
委員	桑原 孝史	食料自然共生経済学教室（准教授）
委員	加藤 卓也	野生動物学研究室（講師）

2. 博物館関連規定

[1] 日本獣医生命科学大学附属博物館組織細則

（平成 28 年 6 月 1 日細則第 12 号）

（目的）

第 1 条 この細則は、日本獣医生命科学大学組織規則第 6 条第 2 項に基づき、日本獣医生命科学大学附属博物館（以下「博物館」という。）の組織について必要な事項を定めることを目的とする。

（構成）

第 2 条 博物館は、次に掲げる者をもって構成する。

- (1) 館長
- (2) 学芸員課程担当教員
- (3) 学芸員資格を有している事務職員

2 博物館に、副館長を置くことができる。

3 博物館に、業務を遂行するため必要な兼務者を置くことができる。

（業務）

第3条 博物館は、博物館法(昭和26年法律第285号。以下「法」という。)に基づき、日本獣医生命科学大学(以下「本学」という。)で生み出された教育と研究の歴史的成果及び卒業生の社会における成果等並びに本学の歴史及び我が国を中心とする獣医畜産学に関わる記録史料(以下「学術資料」という。)を収集、調査、研究、整理及び保管し、学内外に公開するとともに、教育、研究及び社会貢献に資することを目的として、以下の業務を行う。

- (1) 学術資料の収集、保管及び展示し、それらを調査研究すること。
- (2) 保管資料の公開及び他施設との相互貸借すること。
- (3) 学術資料に関する調査研究の成果を普及すること。
- (4) 本学1号棟に係る国登録有形文化財としての保存と利活用に関すること。
- (5) 本学学芸員課程の運営に関すること。
- (6) そのほか、博物館の目的を達成するために必要な事項に関すること。

（運営委員会）

第4条 博物館の円滑な運営、業務遂行を図るため、博物館運営委員会を置く。

2 博物館運営委員会の運営に関する事項は、別に定める。

（博物館の利用基準）

第5条 博物館の利用基準その他博物館に関し必要な事項は、博物館運営委員会の議を経て、学長が定める。

（運営の状況に関する評価等）

第6条 博物館は、法第9条に基づき、博物館の運営の状況について評価を行うとともに、その結果に基づき博物館の運営の改善を図るため必要な措置を講ずるよう努める。

2 前項の評価は、自己評価委員会で行うものとし、必要に応じて学外有識者等で構成する外部評価委員会を置くことができる。

3 博物館は、博物館の事業に関する地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、博物館の運営の状況に関する情報を積極的に提供するように努める。

（改廃）

第7条 この細則の改廃は、合同教授会の議を経て、学長の決裁を必要とする。

附 則

この細則は、平成28年6月1日から施行する。

附 則

この細則は、平成30年4月1日から施行する。

附 則

この細則は、令和5年4月1日から施行する。

附 則

この細則は、令和6年4月1日から施行する。

[2] 日本獣医生命科学大学附属博物館運営基本方針

令和 6 年 10 月 8 日更新（令和 6 年度第 4 回博物館運営委員会にて承認）

基本方針策定の背景

日本獣医生命科学大学附属博物館（以下、博物館）は、学芸員課程の博物館実習施設として、日本の里山と野生動物の展示をコンセプトに、2015 年 4 月に大学附属ワイルドライフ・ミュージアムとして開館した。その後、本学がわが国最初の私立獣医学校として創立された歴史的意義から、わが国における獣医畜産学の歴史的資料の収集・展示の必要性が認識されるようになり、さらに博物館が設置されている本学一号棟が 2020 年に国登録有形文化財（建造物）となったことを受け、その保存・復原や市民公開等を通じた利活用が求められることになった。また、本学における最先端の研究成果を広く社会へ公開し、社会との連携を進める活動の場として、博物館の役割が期待されるようになった。

こうした背景から、2023 年 4 月に館名を大学附属博物館へ変更するとともに関連規定を改正し、博物館のコンセプトを「本学の歴史と獣医・畜産・生命科学の総合的博物館」（本学第 2 期中長期計画）とした。

この新たなコンセプトで博物館を運営するにあたり、博物館における諸活動の目的を本学関係者へ明確化かつ共有化し、また広く社会に提示して、不断に活動の検証と改善を行っていくことが求められる。そこで、博物館法施行規則第 19 条 1 項に定められた基本的運営方針に該当するものとして日本獣医生命科学大学附属博物館運営基本方針（以下、基本方針）を定めるものである。

目的

本基本方針は、博物館法第 2 条に定められた博物館の目的である資料の収集・保管・展示、調査研究、教育普及活動等を実施するにあたり、目指すべき指針を定めるものであり、また博物館の水準の維持および向上を図ることにより、教育、学術および文化の発展並びに地域の活性化に貢献することを目的とする。

基本方針の対象期間

本学は 2031 年に開学 150 周年を迎えることから、本基本方針もこれに準じて 2031 年度までを対象期間とする。また、随時見直しを含めた検討を行い、必要に応じて改定を行うとともに 2032 年度までにそれまでの活動を踏まえた基本方針を再度策定し、2032 年度以降も博物館の活動を継続する。

なお、各年度の事業計画については、本基本方針に基づき博物館運営委員会による審議を経て策定し、合同教授会の手承を得て実施するものとする。

博物館の 5 つのセクションと機能

本学の特色を活かすとともに、基本方針の目的を達成するために、博物館に下記の 5 つのセクションを設置する。

- 1 大学歴史資料館
- 2 ワイルドライフ・ミュージアム
- 3 獣医生命科学館
- 4 研究部

5 学芸員課程

それぞれのセクションの機能は下記の通りである。

大学歴史資料館：本学および獣医・畜産・生命科学の歴史的資料、ならびに国登録有形文化財である一号棟に関する資料を収集し、公開する

ワイルドライフ・ミュージアム：野生動物と人との関わりや保全に関わる資料を収集し、公開する

獣医生命科学館：本学における最新の特色ある研究内容を公開し、その成果を社会へ還元する

研究部：博物館のコンセプトに関連する研究を行っている学内教員で構成し、収蔵資料を活用した研究活動や展示活動を行う

学芸員課程：学芸員課程の運営や活用の検討を行う

運営にあたっての基本的事項

博物館の運営にあたっての基本的事項を以下に示す。

(1) 管理運営

① 運営組織

館長 1 名、副館長 1 名、事務室長 1 名、学芸員 2 名を基本とする（兼任およびパートタイマーを含む）。また、学芸員課程の履修者大幅増員へ対応するため、博物館専任教員を学内異動により確保する。

② 勤務体制

職員の就業時間は原則として学校法人日本医科大学就業規則（規程）に従うこととする。パートタイマーの就業時間は原則として学校法人日本医科大学パートタイマー就業規則（規程）に従うこととする。パートタイマーの始業・就業の時刻および休憩時間は、博物館の開館時間に合わせて調整し、労働条件通知書により指定する。

③ 開館日

日曜日・月曜日・祝日、年末年始、その他大学の定める休日等を除き、年間 150 日以上開館することを目標とする。

④ 開館時間

午前 10 時 30 分から午後 5 時までとする。

⑤ 危機管理

火災、事故などの際の対応マニュアルを整備するとともに、計画的に消防訓練などを行い、来館者と資料の安全・安心の確保に努める。

また、館内に防犯カメラの設置などセキュリティ体制を構築し、来館者が安心して利用できる施設とするとともに、貴重資料の管理に配慮したものとする。

(2) 広報

① 広報

本学受験生や市民へ博物館の諸活動を告知し、理解を深めるとともに、博物館への集客を図るために、印刷物、WEB などさまざまな媒体を通じた広報活動を行う。また、本館が加盟する東京都三多摩公立博物館協議会や日本博物館協会を通じて武蔵野地域外での

認知度向上を図る。

② 国際化の推進

館内の展示等において、外国語表記を行うなど国際化を推進する。

(3) 人材育成・社会貢献

① フェローシップ

将来学芸員を目指す大学生・大学院生らを対象に独自のフェローシップ制度を設計し、実施に向けた準備を進める。

② 博物館実習

他大学を含めた学芸員課程履修生の博物館実習の受け入れを行う。

③ 職員研修

当館教職員の資質向上を目的とし、日本博物館協会等が主催する研修に参加する。

④ 社会貢献

近隣の博物館ならびに学校等と連携した教育事業を推進する。

⑤ ボランティア

学生や市民参加による館運営を進めるため、ボランティア育成講座やボランティア制度の導入を検討する。

(4) 評価

① 内部評価

博物館の運営や事業の実施内容について、博物館運営委員会に必要な改善策を検討し、おおむね5年ごとに本学自己評価委員会で評価を受ける。

② 外部評価

学識経験者等による外部評価により博物館の運営や事業を専門的な見地から客観的に評価するしくみの導入を検討する。

博物館事業の活動方針

本基本方針の目的を達成するために、以下の方針に基づき博物館事業を実施する。

(1) 収集・保管

別途定める博物館資料収集・保管の方針に基づき、本学の歴史・獣医生命科学および野生動物学の歴史・教育に関する歴史資料ならびに自然史資料を収集・保管する。

① 目録作成

収集した資料の目録を作成し、順次公開する。

② 資料管理システム

保管している資料のデータベース化を行い、資料の散逸等がないように管理する。

③ 資料の保管

収集した資料を適切に保管する。また、温湿度管理が可能な保管場所（収蔵庫）の確保について検討する。

④ 資料のデジタル化

収集した資料のデジタル化を実施する。

(2) 展示・公開

展示室の整備を順次行い、常設展および企画展を開催する。また、展示にあたっては、展示資料のリストを来館者に配布するとともに、企画展では図録を作成し販売する。

① 常設展

収蔵資料を活用した常設展示を年間を通じて実施する。

② 企画展

本学の歴史および獣医・畜産・生命科学に関連したテーマの企画展を開催する。開催頻度は年 1 回を目標とする。

③ 講演会

当館の活動に関連した講演会を開催する。開催頻度は年 1 回を目標とする。

④ 公開

原則として開館期間は常時公開とし、可能な範囲で学芸員による展示解説を行う。また、保管する資料を調査・研究等に活用するため、学内外からの資料の閲覧、借用、複写申請があった場合には、可能な限り申請内容に応じて対応する。

(3) 調査・研究

学芸員および研究部教員を中心として、収集・保管した資料の調査研究を進めるとともに、積極的に学外研究機関等との共同研究を行う。また、これらの調査研究の成果は、展示・公開、教育普及事業の他、年報・研究報告等の刊行物により公開する。

(4) 教育・普及活動

① 学芸員課程

学芸員課程の定員は、当面毎年度 50 名（獣医学部獣医保健看護学科および応用生命科学部動物科学科の学生を対象）とする。これに加えて科目履修生等の制度を活用し、社会人を対象とした学生の入学を検討する。

② 教育・普及事業

本学学生や市民等のために講演会・講座・ワークショップ・展示解説・現地見学会等の事業を実施する。

③ 博学連携事業

ア 学校教育連携事業

武蔵野市および三鷹市の小中学校や高校等と連携し、当館所蔵資料を利活用した体験学習などのプログラムを企画し、実施する。

イ 大学間連携事業

武蔵野 5 大学をはじめとする大学および大学附属博物館と博学連携を図る。

④ 地域連携事業

図書館・美術館、コミュニティーセンター等の文化施設、近隣自治体との連携を図る。

(5) その他

博物館の入館料は無料とするが、特別な企画展をはじめ下記のような収益事業を進める。

① オリジナルグッズの開発と販売

将来的なミュージアムショップの開設を念頭に、オリジナルグッズの開発を進め、販売する。

② 一号棟の復原と活用

建築専門家等の協力を得ながら一号棟の歴史資料を調査研究し、必要に応じて復原を行う。また、建物見学会の開催等の活用方法を検討し、可能なものから実施する。

③ 市民スペースの活用

2 階会議室等を対象に、市民への貸し出しをはじめとした活用方法を検討し、可能なものから実施する。

[3] 日本獣医生命科学大学附属博物館 資料収集・保管の方針

令和 6 年 10 月 8 日更新（令和 6 年度第 4 回博物館運営委員会にて承認）

日本獣医生命科学大学附属博物館（以下、博物館）は、博物館運営基本方針の目的を達成するため、本学の歴史・獣医生命科学および野生動物学の歴史・教育に関する歴史資料ならびに自然史資料を収集・保管している。以下は、その収集・保管の方針を明文化したものである。

1. 収集・保管対象とする資料

収集・保管対象は以下の項目に該当する資料とし、移管・委託・寄贈・寄託については個別に収集・保管対象とするかどうかを検討の上判断する。

またこの収集・保管対象は必要に応じて見直し、改善していくこととする。

(1) 歴史資料

① 大学史関連

- ・ 本学の沿革を示す資料
- ・ 本学関係者に関する資料
- ・ 本学の関連施設に関する資料
- ・ その他、本学の歴史に関する資料

② 旧東京市麻布区役所庁舎（1 号棟）関連

- ・ 旧東京市麻布区役所庁舎（1 号棟）に関する資料

③ 獣医生命科学および野生動物学関連

- ・ 獣医生命科学および野生動物学に関する教材（図面、書籍・映像含む）、器具、機器、研究に関する資料
- ・ その他、獣医生命科学および野生動物学に関する資料

(2) 自然史資料

- ・ 動物の標本：本はく製、部分はく製、骨格標本、臓器標本、組織顕微鏡標本、遺伝子標本（血液および細胞の冷凍標本）、絵画、写真および化石等を含む
- ・ その他、動物に関する自然史資料

2. 選択的な資料収集

当館は収蔵施設が未整備のため、当面は下記の基準に従い、計画的かつ選択的に資料収集を行う。

- ① 学術的価値（証拠標本、タイプ標本、絶滅種、絶滅危惧種、固有種、等）
- ② 歴史的価値（時代を象徴、技術的革新、美術的価値、記録的価値、等）
- ③ 未収蔵資料（当館での収蔵の有無）
- ④ 入手困難資料（希少、法的制約、時期的制約、等）

3. 保管の方針

収集した資料は原則的に学内の保管室にて保管する。現状では木造校舎の一部を保管室として活用しているため、温湿度管理が可能な保管場所（収蔵庫）の確保について検討し、適宜資料の保管体制を見直すものとする。

収集した資料は適切に管理をしたうえで研究・展示・貸与等の博物館活動に用いるものとし、資料の保管が困難になった際には、場合により収集した資料を破棄または譲渡する。

IV. 記録

1. 2022 年度企画展「獣医学教育用掛図展～獣医解剖学の系譜と本学の教育～」

日本獣医生命科学大学附属博物館
学芸員 石井奈穂美

2022 年度から 2023 年度にかけて、当館が所蔵する獣医学教育用掛図（日獣大獣医学教育用掛図コレクション）を紹介する企画展を開催した。この間は年報の発行を停止していたことから、本年報にてコレクションの概要と展示の様子を紹介する。

【概要】

- ・ 名称：2022 年度企画展「獣医学教育用掛図展～獣医解剖学の系譜と本学の教育～」
- ・ 会期：2022 年 10 月 2 日～2023 年 5 月 31 日
- ・ 会場：企画展示室
- ・ 主催：日本獣医生命科学大学附属博物館
- ・ 会期中入館者数：939 名

【日獣大獣医学教育用掛図コレクションについて】

大判の絵図や表を掛け軸のように仕立てた視覚教材のことを「教育用掛図」と呼ぶ。西洋においては 18 世紀から 19 世紀にかけて盛んに用いられ、日本では明治期に学校教育の広がりとともに普及した。

「日獣大獣医学教育用掛図コレクション」は、本学の獣医解剖学研究室から譲り受けた掛図 120 点（企画展開始当時）およびポスター 2 点で構成されている。コレクションの中には、近代の日本における家畜解剖学の基礎を確立した田中宏（東京帝国大学家畜解剖学講座 初代教授）の落款が残っているものが 16 点、田中とその門下生である大澤竹次郎の連名の落款が押されたものが 9 点含まれている。大澤は本学の前身校である日本獣医畜産専門学校の教授として獣医解剖学を教育した人物でもある。これらの掛図は、大澤の弟子であり、のちに本学の獣医解剖学教室の教授となる醍醐正之に引き継がれ、以降同教室（現 獣医解剖学研究室）にて保管されていた。

コレクションの中には、田中や大澤に由来を持つ掛図の他に、本学の前身校である私立日本獣医学校および日本高等獣医学校の関係者や卒業生が作成したことが読み取れる掛図が 22 点含まれている。本学図書館が収蔵する当時の卒業アルバムには、これらの掛図を用いた授業の様子を撮影した写真が残されている。

掛図は、黒板や壁に掲げることで大人数に一度に情報を伝達することができる一方で、大型ゆえに保管が難しく、教材として繰り返し使用するうちに劣化した掛図は廃棄されることがほとんどである。本学においても、当館に移管される前の段階で保存状態の悪い一部の掛図はすでに廃

棄されている。獣医学教育に関連した掛図については報告が少なく、東京農工大学獣医解剖学研究室に所蔵されている掛図に関する報告（柴田ら, 2010）が、筆者の知る限り唯一のものである。同報告において同研究室が所蔵する掛図の製作年は「少なくとも 1943 年（昭和 18 年）以前であり、一部のものは 1937 年（昭和 12 年）以前であると考えられる～中略～一部の掛図は、1935～1946 年に在職された大沢竹次郎初代教授の指導の下で研究室所属の画家により作られた可能性がある。」と推測されている。当館のコレクションには、本紙に書かれた情報を踏まえると 1917 年から 1921 年にかけて作成されたことが明らかなものが含まれており、これらの掛図は農工大のものよりも古いものと考えられる。以上より、本コレクションは、田中・大澤と続く日本の獣医解剖学の系譜と本学の繋がりを示すと同時に、本学のみならず日本の獣医学教育の歴史を示す貴重な資料であると言える。

※柴田秀史・北畑浩太郎・神田尚俊（2010）「獣医解剖学教育用掛図の調査」『日本産業動物獣医学会誌』63（4）：271-274.

【展示した掛図について】

コレクションに含まれる掛図は、当館に移管された時点で表装の破損や乾燥によるひび割れが確認されており、内容の確認のために無理に広げると劣化がさらに進行する危険性があった。そのため、2019 年度に紙資料の扱いに長けた専門業者に依頼し、採寸・写真撮影・材料と画材の把握・損傷劣化状態の確認を行った。調査の結果劣化が著しいと判断された掛図のうち、本学の歴史と関わりが深い 5 点を選定し、2020 年度から 2021 年度にかけて修復を行った。この際、5 点中 1 点は本来の姿を再現するため修復後に再度軸装を施し、残りの 4 点は今後の活用や保管を考慮して本紙のみの形に変更した。本企画展では、このような経緯を経て修復を終えた以下の 5 点の掛図を展示した。なお、以下①～⑤に示した本紙の寸法は、修復前に計測した値である。

① 馬の前望および後望の肢勢図（掛図 no.6） ※額装した本紙を展示

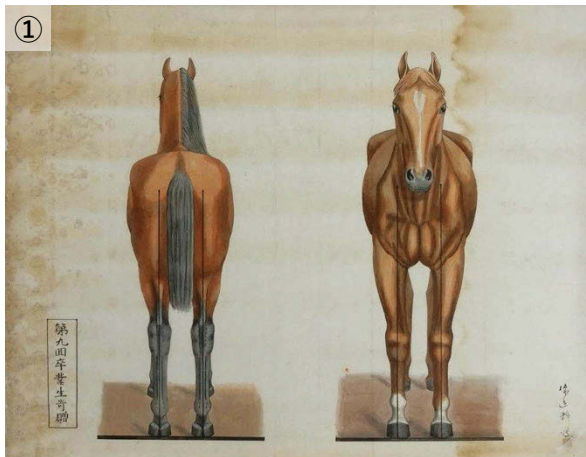
〔材料（表装/ 本紙）〕 裂/ パルプ紙

〔画材〕 墨・着彩

〔表装の寸法〕 1122×1212mm

〔本紙の寸法〕 922×1186mm

「肢勢」とは馬が四肢を揃えて立っている時の肢の状態のことで、タイトルの通り馬を前後から見た際の肢勢が図示されている。描かれている馬は、体の左右のバランスが取れており体軸もしっかりとしている。また、四肢に均等に体重がかかっており、理想的な馬の姿と言える。本紙のサインや落款から、当時の獣医師で肖像画や馬学教育用掛図などの作画を請け負っていた磯邊休之進（雅号：磯邊静波）に、私立日本獣医学校の第 9 回生（1920 年 3 月卒業）が依頼して作成した掛図と推測される。



② 痙攣疝（けいれんせん）（掛図 no.4）※額装した本紙を展示

〔材料（表装/ 本紙）〕 揉紙/ パルプ紙

〔画材〕 墨

〔表装の寸法〕 1440×990mm

〔本紙の寸法〕 1210×920mm

馬の腹痛を伴う病気を総称して「疝痛」（せんつう）と言い、特に、寒さや興奮、疲労、質の悪い餌などが原因となって消化管が強く収縮することにより引き起こされる腹痛を「痙攣疝」と言う。疝痛を発症した馬は、落ち着きなく腹部を気にするようになり、症状が悪化すると七転八倒するようになる。掛図では、このような症状の変化がよく図示されており、馬が腹部に視線を送る様子や、七転八倒する馬が怪我をしないよう、藁の束をクッションとして置いている様子が読み取れる。本紙のサインや落款から、私立日本獣医学校の第10回生（1921年3月卒業）が①と同様に磯邊休之進に依頼して作成したものと推測される。



③ 馬左側内蔵の図（掛図 no.1）※軸装した実物もしくはレプリカを展示

〔材料（表装/ 本紙）〕 裂/ パルプ紙

〔画材〕 墨・着彩

〔表装の寸法〕 1433×1572mm

〔本紙の寸法〕 992×1486mm

コレクションの中でも最大の掛図で、タイトルの通り馬の体の左側から内蔵を見た状態が図示されている。本紙に「Sanae umeno 1917」と書かれていることから、この掛図は梅野早苗が私

立日本獣医学校に在学していた 1917 年に作成したものと推測される。梅野早苗は本学の前身校の卒業生であると同時に、父である梅野信吉（私立獣医学校第 1 回生、私立日本獣医学校校長）の遺志を継承して本学の経営に専心した人物である。

この掛図を使用した授業の様子を撮影した写真が大正 9 年の卒業アルバムに掲載されており（右下図参照）、掛図の本紙には授業の際に書き込まれたと思われるチョークの跡が残っている。



（右画像出展：日本獣医学校第 9 期生（1920）卒業アルバム）

④ 後肢の神経（掛図 no.76） ※額装した本紙を展示

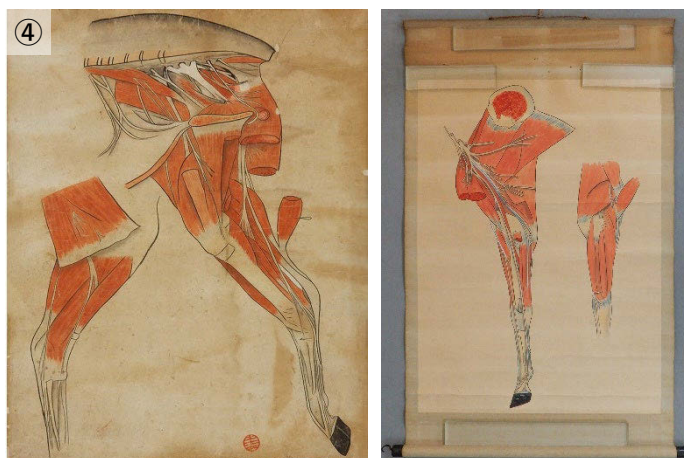
〔材料（表装/ 本紙）〕 パルプ紙/ パルプ紙

〔画材〕 墨・鉛筆・インク・着彩

〔表装の寸法〕 900×601mm

〔本紙の寸法〕 696×552mm

本紙の右側には後肢の内面の、左側には後肢の外面の神経が描かれており、下部には田中宏の落款が確認できる。本コレクションには④とよく似た掛図「前肢の神経」（掛図 no.89、右下図参照）も含まれているが、こちらには落款がない。コレクションにはタイトル部分が破損したものや、落款やサインが無いものが多く含まれているため、全貌を明らかにするためにはさらなる調査が必要である。



⑤ 破損のためタイトル不明（掛図 no.70） ※額装した本紙を展示

〔材料（表装/ 本紙）〕 パルプ紙/ パルプ紙

〔画材〕 墨・インク・着彩

〔表装の寸法〕 708×755mm

〔本紙の寸法〕 545×707mm

表装の破損のため本来のタイトルを確認することはできないが、馬の頭部を左側からみた時の顔面の筋肉を中心に、鼻・唇・耳の筋肉が描かれている。本紙には田中宏の落款があり、田中宏が執筆した『家畜解剖図 馬之部 第二輯（筋）』（右下図参照）にはよく似た図が掲載されている。

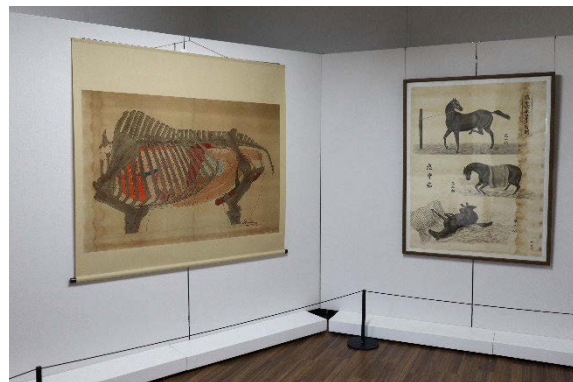


（右画像出典：田中宏（1913）『家畜解剖図 馬之部 第2輯（筋）』）

【展示の様子】

企画展示室として用意できたスペースは4.7×3.9m程度と狭く、大型の掛図5点を展示すると解説パネルを設置する場所が確保できないことが判明したことから、解説パネルを展示室正面の廊下に設置をした。

廊下には、4台のイーゼルを設置し、掛図そのものの説明や、当館のコレクションの概要をまとめた解説パネルを設置した。展示室には、5点の掛図とともに、それぞれの掛図の概要をまとめた解説パネルを1枚設置した。



【企画展を終えて】

COVID-19感染拡大防止のため、当館は2020年2月29日より臨時休館を余儀なくされた。その後、同年6月からは活動拠点である一号棟の整備工事に伴う長期休館が始まり、工事終了後の展示準備期間を含めると、2022年9月末までの約2年半の間は展示活動を休止していた。そのため、本企画展が展示活動再開後初の企画展となった。長期休館以前の一号棟の2階には2つの展示室（自然系展示室・歴史系展示室）が設置されていたが、本企画展では2014年に本学事務機能

が新校舎に移動して以来使われなくなっていた旧小会議室を新たな展示室（企画展示室）として活用した。しかし、展示室が狭く複数人での見学に支障をきたしたことから、本企画展の終了後は企画展示室を閉鎖し、以降の大型展示（第 1 回企画展「麒麟が来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」/ 第 1 回特別展「NVLU 奄美プロジェクト -研究・保全・そして未来-」）では自然系展示室の一角を会場として活用している。

企画展が始まる直前の 2022 年 9 月には、解体予定の校舎の一室から 22 点の掛図が新たに発見され、その後の調査により、これらの掛図は私立日本獣医学校の第 11 回生が学校に寄贈したものであることが判明した。従来のコレクションには同校の第 9 回・第 10 回卒業生が寄贈したものが含まれており、新たに発見された 22 点はこれらの資料に続くものであると考えられる。

新たに見つかった 22 点は 2023 年 2 月に当館に移管され、当館が所蔵する掛図は 144 点となった。いずれの掛図も本紙が見える状態での写真撮影が完了しているため、今後は各掛図の画像をネット上で公開することを検討している。

最後になるが、本企画展の開催にあたりご協力を賜った関係機関および関係者の皆様に心より御礼申し上げる。

2. 第 1 回企画展「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」

日本獣医生命科学大学附属博物館

学芸員 石井奈穂美

当館は 2015 年に「日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアム」として開館し、2023 年に「日本獣医生命科学大学附属博物館」に名称を変更した。館名変更後 1 回目の企画展として「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」を開催した。

【概要】

- ・ 名称：第 1 回企画展「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」
- ・ 会期：2023 年 11 月 3 日～2024 年 6 月 21 日
 - ※ 2023 年 8 月 19 日と 20 日にプレオープンを実施
 - ※ 2024 年 5 月末の終了を予定していたが、好評につき会期延長
- ・ 会場：自然系展示室
- ・ 主催：日本獣医生命科学大学附属博物館
- ・ 会期中入館者数：3,784 名（プレオープン日を含む）

【開催趣旨】

当館が活動拠点とする一号棟の 2 階には古くからキリンの全身骨格標本が展示されている。この標本の来歴は不明とされていたが、当館の調査によりその正体が「長次郎」と名付けられたキリンであることが判明した。長次郎は 1940 年 10 月に上野動物園にて誕生し、1942 年 7 月に井の頭自然文化園に移動したのち、1944 年 12 月に死亡した個体である。死亡後は本学（当時の校名は日本高等獣医学校）にて解剖され、4 年以上の歳月を経て骨格標本となった。それ以降本学とともにあり続けた長次郎の骨格標本は、本学が誇る宝の一つであると言える。

長次郎の両親である「長太郎」と「高子」は日本で初めて繁殖に成功したキリンのペアである。同じペアからは長次郎よりも先に 3 頭のキリンが誕生しているが、どの個体の標本も長い歴史の中ですでに消失している。長次郎の骨格標本は現存する国内生まれのキリンの標本の中で最も古いものであり、日本の動物園の歴史から見ても貴重な標本であると言える。

本企画展では長次郎の骨格標本にスポットをあて、上野動物園から始まった日本におけるキリンの飼育の黎明期を振り返りながら、長次郎が歩んできた歴史を紹介した。あわせて、本学で行われている動物園との共同研究に関連したパネルを設置し、現在の本学と動物園の繋がりを解説した。

【展示構成】

- はじめに
- I. キリンが日本にやって来た
- II. 2頭の麒麟児
- III. 麒麟児の行方
- IV. 長次郎の現在・未来
- 本学と動物園

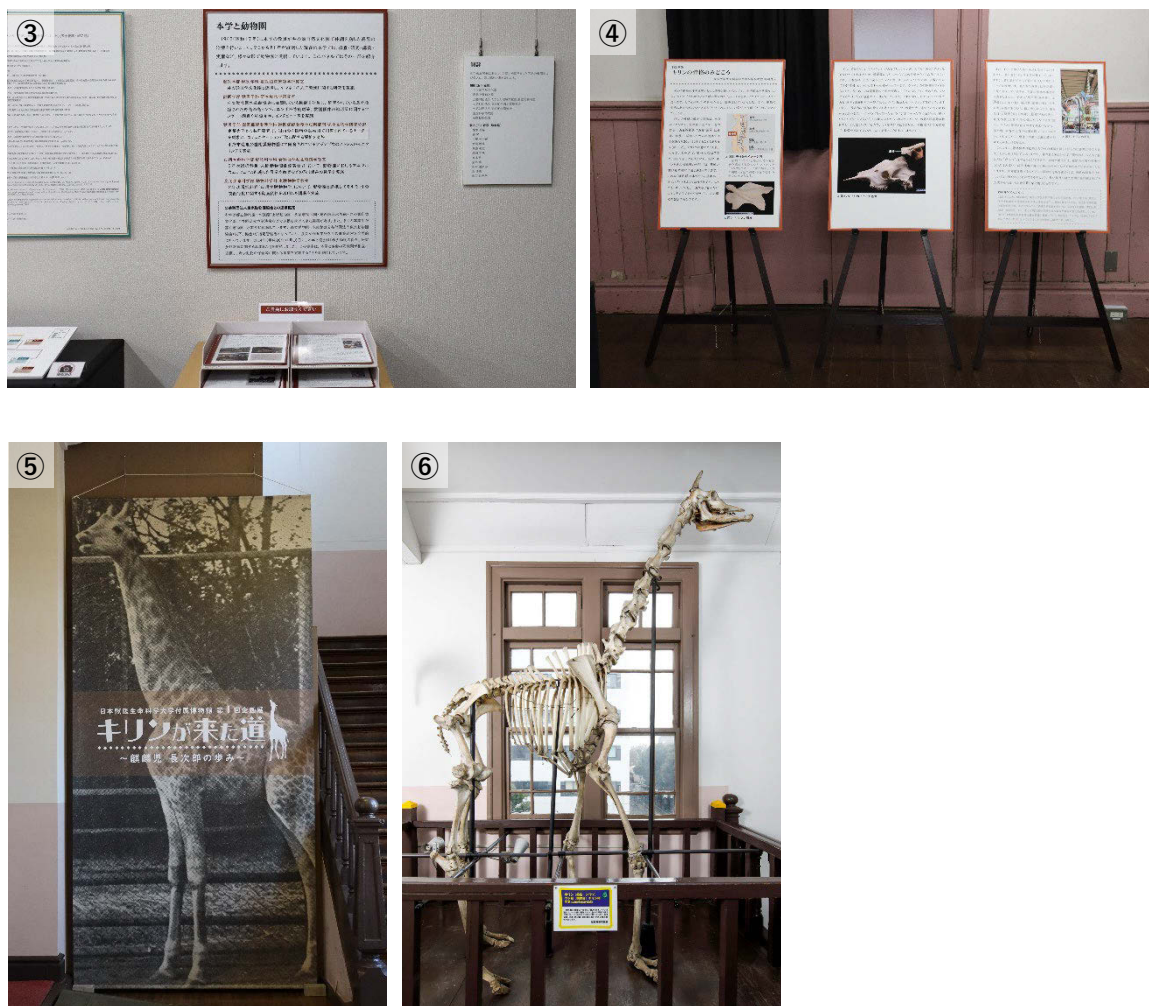
【展示の様子】

自然系展示室内に設置した企画展の導入部分には、幅 2.4m・高さ 1.8m の大型タペストリーを設置した。導入に続く「I. キリンが日本にやって来た」では、初代のキリン「ファンジ」「グレー」の来日から、2代目のキリンとしてやって来た長太郎と高子の繁殖までを紹介した。「II. 2頭の麒麟児」では、長太郎と高子の第一子である「高男」と本企画展の主演である長次郎の誕生について解説し、2頭が井の頭自然文化園に移動するまでの経緯を紹介した。「III. 麒麟児の行方」では、井の頭自然文化園で死亡した高男と長次郎が標本になるまでを紹介した。「IV. 長次郎の現在・未来」では、長次郎の骨格標本が秘める可能性について紹介した。各章のパネルの下部には、本企画展のために収集した絵葉書や冊子などの紙資料を中心に展示した。「本学と動物園」では、本学が国内の動物園とともに実施している取り組みをまとめた解説パネルを設置し、あわせて詳細をまとめた資料を配布した。

その他、企画展会場の一角に、郡司芽久先生（東洋大学生命科学部生命科学科助教）による特別解説パネルを設置した。また、国立科学博物館から借用したキリンの頭蓋骨を展示し、哺乳類の角についての補足説明を行った。

本企画展にあわせ、井の頭自然文化園で撮影された長次郎の生前の写真を等身大に引き伸ばしたタペストリーを作成した。タペストリーの高さは 3.7m あり、展示室内に設置することができなかったため、展示室に最も近い階段の横に設置した。





- ① 展示室の様子 1：導入部分
- ② 展示室の様子 2：II.2 頭の麒麟児
- ③ 展示室の様子 3：本学と動物園
- ④ 展示室の様子 4：郡司芽久先生による特別解説パネル
- ⑤ 等身大タペストリー
- ⑥ 長次郎の骨格標本

【企画展を終えて】

前年度に実施した企画展「獣医学教育用掛図展～獣医解剖学の系譜と本学の教育～」(20 ページ参照)では、企画展会場として一号棟 2 階の一室(旧小会議室)を活用したが、企画展会場としては手狭であり複数人での見学に支障をきたしていたことから、本企画展では自然系展示室の一角を会場として活用した。自然系展示室の常設展示との調整が必要ではあったが、これにより広いスペースを確保することが可能となった。

当館としては初めての試みとして、本企画展にあわせて 2 種類の大型タペストリーを作成・設置した。展示の導入部分に設置したものは、常設展示部分との境目がわかりやすく、来館者の注目を集めることができたため、本企画展の次に開催した特別展(第 1 回特別展「NVLU 奄美プロジェクト -研究・保全・そして未来-」)でも同様の物を採用している。

長い歴史の中で忘れられかけていた長次郎だが、企画展にてその歩みを紹介することで、多くの方にその存在を認知してもらうことができた。プレオープンを含むと会期中に合計 3,784 名の方が来館され、様々な方からご好評をいただいたが、企画展の存在を知った一人の卒業生から井の頭自然文化園で撮影された自身の母親と長次郎の姿が写る写真を提供していただけたことは、当館としてとても嬉しい出来事であった。筆者の知る限り井の頭自然文化園時代の長次郎の写真は少なく、貴重な情報である。

企画展の主演として多くの来館者にご覧いただいた長次郎だが、標本を支える金具の破損による頭部の落下の可能性が指摘されたことを受け、企画展開始直後の 2023 年 11 月 10 日に頭部の補強工事を実施した。これにより頭部の落下は免れたものの、そのほかの金具も劣化が進んでおり、長年の展示によるホコリ汚れや太陽光による標本の劣化が確認されたことから、2025 年 1 月に解体工事を実施した。解体を惜しむ声もあったが、来館者の安全と標本の保管を考慮すると最善の選択であったと考えている。さらに、2026 年 2 月には骨格標本のクリーニング作業を実施し、保存状態が改善されている。解体されることにより、長次郎の骨を個別に活用することが可能となり、2025 年 6 月から実施しているミニ展示「長次郎の再出発」では、頭蓋骨と頸椎を並べて展示している。今後は、標本の状態を考慮しつつ研究等にも活用しながら情報の発信を続け、長次郎の存在が再び忘れられることのないように努めたいと考えている。

最後になるが、本企画展の開催にあたりご協力を賜った関係機関および関係者の皆様に心より御礼申し上げる。

参考：企画展参考文献

企画展開催にあたり、下記の資料を参考とした。（五十音順・ABC 順）

〈書籍・報告書〉

- ・ 池田真次郎・高橋峯吉・安松京三 ほか（1984）『全集日本動物誌 29 日本の野鳥 動物たちと五十年 日本昆虫記Ⅴ』講談社.
- ・ 岩田久二雄・川村多実二・高島春雄・崎川範行（1984）『全集日本動物誌 22 自然観察者の手記 動物と人生 動物渡来物語 鳥のノート』講談社.
- ・ 恩賜上野動物園編（1952）『恩賜上野動物園創立 70 周年記念小史』東京都.
- ・ 公益財団法人東京動物園協会編（2012）『井の頭自然文化園の 70 年』公益財団法人東京動物園協会.
- ・ 小宮輝之（2010）『物語 上野動物園の歴史 園長が語る動物たちの 140 年』中央公論新社.
- ・ 小森厚（1981）『上野動物園』郷学舎.
- ・ 佐々木時雄（1975）『動物園の歴史 日本における動物園の成立』西田書店.
- ・ 清水勲（公益社団法人日本動物園水族館協会生物多様性員会キリン計画管理者）、下康浩（公益社団法人日本動物園水族館協会生物多様性委員会有蹄類事業調整者）監修（2022）『2022 キリン国内血統登録書』公益社団法人日本動物園水族館協会.
- ・ 東京都恩賜上野動物園編（1982）『上野動物園百年史 本編』東京都恩賜上野動物園.
- ・ 東京都恩賜上野動物園編（1982）『上野動物園百年史 資料編』東京都恩賜上野動物園.

- 東京都建設局西部公園緑地事務所・井の頭自然文化園管理事務所編（1992）『井の頭自然文化園 50年の歩みと将来 資料編』東京都建設局西部公園緑地事務所，井の頭自然文化園管理事務所.
- 福田三郎・成岡正久・伊谷純一郎（1982）『全集日本動物誌 4 実録上野動物園 豹と兵隊 チンパンジーの原野』講談社.
- むさしの自然史研究会・武蔵野市生物生息状況調査会編著（2001）『武蔵野市生物生息状況調査報告書』武蔵野市環境部環境対策課.
- 持丸依子・中川成生・小宮輝之編、小宮輝之監修（2012）『動物たちの130年 上野動物園のあゆみ 130 Years of Ueno Zoo in Photographs』公益財団法人東京動物園協会.

〈論文〉

- 川田伸一郎・小森日菜子・郡司芽久（2023）「明治時代のキリンの標本について」『国立科学博物館研究報告 A 類（動物学）』49（2）：81-95.
- 香坂美和・清水勲・高柳真世（2023）「多摩動物公園ができること」『多摩のあゆみ』（189）：16-25.
- 醍醐正之（1956）「解剖学教室通信」『日本獣医畜産大学同窓会誌』（復刊第1号）：20-21.
- 細田孝久（2013）「国内のキリン個体群の状況と亜種問題」『獣医畜産新報』66（11）：822-825.
- 村田浩一（2003）「研究者による動物園の飼育動物を材料とした研究－動物園は動物学研究の宝庫である－」『哺乳類科学』Supplement 3：59-62.
- 村田浩一（2019）「動物園の歴史的背景としての学術研究 ～極東の片隅で何を継承し、何を興し、そして何を発信すべきか？～」『日本野生動物医学会誌』24（2）：41-47.
- 無記名（1939）「ジラフ（キリン）の雙胎児」『自然科学と博物館』10（114）：18.
- 無記名（1943）「陸軍獣醫學校五十周年記念 展覧會參觀の記」『陸軍獣醫團報』（407）：140-155.
- 無記名（1994）「キリンの骨格標本」『日本獣医畜産大学父母会会報 むさしの』（10）：1.
- 森徹士（2015）「『戦時猛獣処分』の真相に迫る：戦争にまつわる70年前の動物園の悲話と実像」『日本獣医師会雑誌』68（12）：734-740.
- 湯城吉信（2008）「ジラフがキリンと呼ばれた理由：中国の場合、日本の場合」『人文学論集』26：69-96.
- Fennessy, J. et al. (2016). Multi-locus analyses reveal four giraffe species instead of one. *Current Biology*, 26 (18): 2543-2549.
- Hassanin, A. et al. (2007) Mitochondrial DNA variability in *Giraffa camelopardalis*: Consequences for taxonomy, phylogeography and conservation of giraffes in West and central Africa. *Comptes Rendus Biologies*, 330 (3): 265-274.
- Petzold, A. and Hassanin, A. (2020) A comparative approach for species delimitation based on multiple methods of multi-locus DNA sequence analysis: A case study of the genus *Giraffa* (Mammalia, Cetartiodactyla). *PLoS ONE*, 15 (2): e0217956.

〈新聞〉

- 朝日新聞朝刊・夕刊（1933～1947年発行分）
- 読売新聞朝刊・夕刊（1933～1947年発行分）

3. <第 1 回企画展開催記念>キリン講話会開催

日本獣医生命科学大学附属博物館
学芸員 廣瀬光子

2023 年 11 月より始まった第 1 回企画展「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」の開催を記念し、2024 年 4 月に当館主催のイベント「キリン講話会」を開催した。なお、本報告にある【プログラム】における演者の肩書はイベント開催当時のものであり、また【イベントの記録】は 2024 年 5 月 16 日に本学公式ウェブサイトに掲載したレポートを元に加筆・修正したものである。

【イベントの概要】

- ・ 名称：<第 1 回企画展開催記念>キリン講話会
- ・ 主催：日本獣医生命科学大学附属博物館
- ・ 共催：日本獣医生命科学大学 同窓会・日本獣医生命科学大学 後援会
- ・ 後援：（公財）東京動物園協会（上野動物園・多摩動物公園・井の頭自然文化園）・武蔵野市教育委員会・三鷹ネットワーク大学推進機構・国立科学博物館
- ・ 日時：2024 年 4 月 13 日（土） 13：30～16：30
- ・ 場所：日本獣医生命科学大学 E 棟 1 階 111 講義室
- ・ 定員：300 名
- ・ 参加費：無料
- ・ 申し込み：事前申し込み制（空席がある場合、当日参加可）

【プログラム】

13：30 開会挨拶 羽山伸一（日本獣医生命科学大学附属博物館長）

13：45 講演 1 キリンの来た道と日獣大博物館
石井奈穂美（日本獣医生命科学大学附属博物館学芸員）

14：15 講演 2 キリンとその進化
郡司芽久（東洋大学生命科学部生命科学科助教）

<休憩>

15：25 講演 3 明治時代のキリンの標本
川田伸一郎（国立科学博物館動物研究部研究主幹）

15：45 講演 4 国内キリンの個体群管理について
清水勲（（公社）日本動物園水族館協会生物多様性委員会キリン計画管理者、
多摩動物公園飼育展示課北園飼育展示係主任）

16：05 講演 5 野生のキリンのくらしと、そこから見える保全のありかた
齋藤美保（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教）

16：25 閉会挨拶 鈴木浩悦（日本獣医生命科学大学学長）

【イベントの記録】

このイベントは、当館が大学附属博物館と改称して初めての企画展である「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」の開催を記念し、企画展の主役であるキリンをより深く知っていただくことを目指して開催した。

当日は日本全国から 247 名（関係者込）にご参加いただき、会場はほぼ満席となった。参加者にはこのイベントの共催や後援をいただいた関係団体の方々や本学の学生・教職員だけでなく、地方の動物園関係者の方、キリンが好きな一般の方、武蔵野市や三鷹市の一般市民の方、他大学の学生の方など、幅広い層の方がいらっしゃり、石井学芸員ほか 4 人の先生方のご講演を 3 時間にわたりお聴きいただいた。それぞれの講演者の講演内容の詳細については、33 ページから 37 ページの「参考：キリン講話会要旨集（抜粋）」にまとめたので参照願いたい。

イベントは午後に実施されたが、参加者の中には午前中から大学に来られる方も多く、イベント終了後も含めて多くの方に博物館もご見学いただいた。特に企画展部分は皆さん熱心にご覧いただき、写真を撮る方も多くいらしゃった。

このイベントでは、参加者（関係者を除く）の約 7 割におよぶ 160 名の方にアンケートにご協力いただいた。講演の内容については 87%の方に良かったと評価いただき、多くの方にご満足いただけた。また、「キリンの魅力が伝わり、より好きになりました」「この大学でしか聴けない企画を今後もお願いします」といった好意的な意見や、「長次郎の骨格標本は後世への引き継ぎが適切に行われるよう切に望みます」といった博物館への期待やご要望などもお寄せいただいた。これらの意見は、26 ページからの『IV-2：第 1 回企画展「キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」』にて述べた長次郎の解体と保管へとつながっている。またこのイベントは開催後の反響も大きく、キリン講話会の内容を元にした本の出版も企画され、2026 年 3 月に工作舎より『キリンが来た道 麒麟児 長次郎の歩み』として出版された。

当館としては初めての大規模な主催イベントとなり、運営上は不手際もあったが、関係者の皆様のご協力により無事に終わることが出来た。改めて当日参加してくださった皆様、共催いただいた本学同窓会ならびに後援会、さらにご後援いただいた公益財団法人東京動物園協会および所属恩賜上野動物園・多摩動物公園・井の頭自然文化園、武蔵野市教育委員会、三鷹ネットワーク大学推進機構、国立科学博物館の関係者の皆様、またご講演を引き受けていただいた講演者の皆様および当日お手伝いいただいた学生を含むスタッフの皆様に、この場を借りて御礼申し上げる。





- ① 講話会会場の様子
- ② 館長による挨拶
- ③ 当日は講話会参加者を対象とした博物館の特別開館を実施した（写真は展示室の様子）
- ④ 長次郎の骨格標本を見る参加者

参考：キリン講話会要旨集（抜粋）

以下の文章は、本イベント来場者に配布した要旨集の中から、各講演者による文章を抜粋したものである。なお、講演者による加筆修正を行った部分もあるが、記載されている情報は基本的には講話会開催当時（2024 年 4 月）のものをそのまま掲載したため、現状とは異なる記述が含まれている旨、ご了承ください。

公演 1 キリンの来た道と日獣大博物館

石井奈穂美（日本獣医生命科学大学附属博物館学芸員）

日本獣医生命科学大学附属博物館は、2015 年（平成 27 年）に日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアムの名称で開館した大学附属の博物館である（2023 年に現在の館名に改称）。活動拠点である一号棟は 2020 年（令和 2 年）に「旧東京市麻布区役所庁舎（日本獣医生命科学大学一号棟）」の名称で国の登録有形文化財（建造物）となった。一号棟の 2 階には、博物館が開館するよりも前からキリンの全身の骨が組み立てられた状態で展示されている。標本の来歴は不明とされていたが、当館の調査により、その正体が「長次郎」と名付けられたキリンであることが判明した。

日本におけるキリンの飼育の歴史は 1907 年（明治 40 年）まで遡ることができる。この年の 3 月 18 日に、ドイツの動物商カール・ハーゲンベックから購入した 2 頭のキリンが上野動物園に到着した。日本初のキリンを見ようと上野動物園には入園者が詰めかけたが、2 頭の飼育環境は整っていたとは言い難く、残念ながら到着の翌年に 2 頭とも死亡した。2 代目のキリンは 1933 年（昭和 8 年）の 8 月 21 日に上野動物園に到着し、公募によりオスは「長太郎」、メスは「高子」と命名された。1936 年（昭和 11 年）4 月には 2 頭の交尾が確認され、翌年 7 月に待望の第一子「高男」が誕生した。これが国内におけるキリンの初繁殖の記録である。1939 年（昭和 14 年）に高子は双子を死産したものの、1940 年（昭和 15 年）10 月には次男にあたる「長次郎」が誕生した。

1942 年（昭和 17 年）に井の頭自然文化園が開園した。これに伴い、上野動物園から高男と長次郎を含む複数の動物が井の頭自然文化園に移動した。高男は同年 7 月 12 日に、長次郎は 7 月 13 日に

井の頭自然文化園に到着したが、高男は到着直後に体調を崩し、3 日後に死亡した。なお、このときの高男の治療を本学の前身校である日本高等獣医学校の教員が担当している。長次郎の井の頭自然文化園での生活も長続きはせず、1944 年（昭和 19 年）12 月 17 日に肺炎により死亡した。死亡時の年齢は高男が 5 歳、長次郎が 4 歳であった。長次郎の死亡後、日本高等獣医学校が個体の払い下げを受け、解剖の実習に使用したのち、骨格標本作製した。骨格標本の作製には 4 年以上の年月が費やされた。完成当時は解剖実習場と呼ばれた校舎の中に展示されていたが、建物の解体に伴い一号棟の 2 階へと移され、現在まで展示され続けている（注：2025 年 1 月に骨格標本を解体したため現在は展示を休止している）。

死亡した高男の毛皮は上野動物園が、骨格は陸軍獣医学校が保存した。また、1939 年に生まれた双子の液浸標本は国立科学博物館が保存した。しかし、いずれの標本も現在までに消失している。よって、現存する国内で生まれたキリンの標本の中で、最も古いものが長次郎の骨格標本であるといえる。長次郎の骨格標本を解析することで、国内のキリン飼育の黎明期における飼育環境の評価や、当時導入されたキリンの種の特定につながることを期待される。

長次郎の歩んできた歴史は、当館の館名変更後第一回目となる企画展「キリンが来た道～麒麟児長次郎の歩み～」にて紹介をしている（会期：2023 年 11 月 3 日～2024 年 5 月 31 日）（注：好評につき 2024 年 6 月 21 日まで会期を延長した）。企画展の開催を記念して行われる本講話会では、企画展では紹介しきれなかった補足の情報や、1936 年頃に上野動物園で撮影されたキリンの動画を紹介する。

公演 2 キリンとその進化

郡司芽久（東洋大学生命科学部生命科学科助教）

キリン（*Giraffa camelopardalis*）は、偶蹄目キリン科に属する哺乳類の 1 種である。成熟すると 2m にも達する長大な首と、それに負けずとも劣らない長い四肢が特徴的な生き物で、現在地球上に生息する哺乳類の中で最も背が高い種としても知られている。アフリカ大陸のサハラ砂漠以南に生息し、野生下での推定個体数は 10 万頭前後と言われている。長らく絶滅の心配はされていなかったものの、近年の調査により過去 30 年間で個体数が 40% 近くも減少している可能性が指摘され、2016 年には国際自然保護連合（IUCN）によって VU（絶滅危惧Ⅱ類）に選定されている。その後、保護活動が積極的に行われるようになり、ここ数年では個体数が上昇傾向にあると考えられている。

本講演では、キリンというユニークな生き物の進化について、2 つの視点から掘り下げていく予定である。まず 1 つ目は、「キリンは何種いるのか？」という疑問から、キリンの種分化についてご紹介する。これまで、多くの研究者らは、キリンを 1 種の生き物としてみなしてきた。しかし近年の研究により、「キリンは、遺伝子の特徴が異なる 4 つの集団に分けることができる」という説が提唱されはじめた。遺伝子の特徴が異なるということは、4 つの集団の間では、遺伝的交流（つまり交配）がほとんど行われていないことを意味する。このことから、この研究チームは、4 つの集団をそれぞれ別の種としてみなし、4 種とするのが良いのではないかと主張しているというわけだ。

ただし、「キリン 4 種説」は即座に受け入れられているわけではない。一般的に、種とは「交配し、繁殖能力をもった仔を産むことができる集団」のことを指す。こうした考え方のことを、生物学的種概念と呼ぶ。生物学的種概念に基づき“別種”とされた種同士で交配を行った場合、大抵は繁殖がうまく

く成立せず、たとえ成立して仔が生まれたとしても、仔には繁殖能力が備わっていないことが知られている。しかしキリンの場合、飼育下では長らく 1 種として扱ってきたため、前述の研究で提案された“別種”同士を同じ場所で飼育し、繁殖をしてきた歴史がある。“別種”同士で交配しても、繁殖能力をもった仔が生まれてくることがわかっているのである。また、非常に稀ではあるものの、野生下においても“別種”間交雑個体と見られるケースが確認されている。こうした事情もあり、IUCN は現時点ではキリンを 1 種として扱っている（注：毛皮の模様と地理的分布に基づく 9 つの亜種からなる 1 つの種である、と記載している）。ただし今後、キリンの保護活動がより活発化していく中で、「遺伝的特徴の異なる 4 つの集団をどのように維持していくのか？」という点は熟慮しなければならない点ではある。集団ごとに保護していくとなると、1 種として保護管理していくよりもずっと綿密な計画が必要となるからだ。

2 つ目のトピックは、絶滅したキリン類についてである。キリンの長い首は、ダーウィンの進化論を説明する際に頻繁に登場するなど、進化論を解説する上で欠かせないものである。「なぜ進化の過渡期にあたるような“首が中途半端に長いキリンの化石”が見つからないのか？」という疑問は、絶滅したキリン類をめぐる最大の疑問の 1 つだろう。本講演では、化石キリン類の写真を紹介しながら、キリンの仲間の多様性や進化史について解説する。

公演 3 明治時代のキリンの標本

川田伸一郎（国立科学博物館動物研究部研究主幹）

国立科学博物館には明治時代に作成されたキリンの剥製が一点所蔵されている。標本登録番号は NSMTM567 でオス個体、帝室博物館（現在の東京国立博物館）から関東大震災後に移管された「帝室コレクション」の一つである。帝室博物館には移管以前に撮影された展示風景の写真が残されているが、キリンが水を飲むときの姿勢として特徴的な、前肢を左右に広げ、頭部を地面につけるような姿勢で製作されている M567 を見るができる。同じ写真にはもう一個体、天井を見上げるように直立した姿勢の M568 のメス個体が写っているが、こちらの標本も同様に国立科学博物館に移管されたが、後に廃棄処分されたらしい。

これらのオスとメスはそれぞれ「ファンジ」と「グレー」という個体名を持ち、ウィキペディアにも解説されている有名動物である。1907 年にドイツ動物商のハーゲンベックから帝室博物館が購入し、当時博物館附属だった上野動物園で日本初公開された。そのいきさつは日本の動物園の歴史において様々な記録が残されているのだが、死後どのようにして剥製となり、博物館で展示されるに至ったかはよくわかっていなかった。

帝室博物館の流れをくむ東京国立博物館では、2022 年に創立 150 周年を迎え、帝室博物館当時の資料なども含めた特別展を開催した。その中で国立科学博物館所蔵の M567 も展示したいとのことで、剥製の大規模修復が行われた。修復作業の過程で剥製の内部構造の一部を明らかにすることができた。また同じころ、M567 がどのようにして剥製化されたのかを記した記録が当時の少年雑誌『少年世界』にあるという情報が演者の友人からあり、関連する文献を調査したところ、同標本の記録のみならず帝室コレクションについての情報が蓄積されつつある。講演ではそのあたりをお話ししようと思う。

公演 4 国内キリンの個体群管理について

清水 勲（（公社）日本動物園水族館協会生物多様性委員会キリン計画管理者、
多摩動物公園飼育展示課北園飼育展示係主任）

日本のキリン（*Giraffa camelopardalis*）飼育の歴史は 1907 年にハーゲンベック（ドイツの動物商）から 2 頭のキリンを購入したことから始まった。当時、キリンを飼育することは難しく、海外から導入されたキリンの多くが死んでしまい、繁殖に成功しても子どもはすぐ死んでしまったため、ほとんど数が増えることはなかったが、1960 年代から徐々に繁殖数が増え、子どもも無事成育して次世代を作れるようになったため徐々に個体数が増えてきた。1976 年に 100 頭を超えると 1982 年には 200 頭を超えるなど瞬く間に増加した。このままでは血統管理ができなくなる恐れが出てきたため、1996 年に多摩動物公園が全国のキリン飼育園館にアンケート調査を実施し、過去も含めた個体情報を集め、1907 年から約 100 年分のキリンの出生や死亡、移動の情報をまとめた国内血統登録書を発行したことにより国内キリンの個体群管理が始まった。

日本動物園水族館協会（JAZA）には継続的に飼育管理することが必要もしくは望ましいと認められる種（JCP（JAZA Collection Plan）種）があり、さらにその種を 4 つのカテゴリー（管理種、登録種、維持種、調査種）に分けている。キリンは当初登録種として、個体情報等の登録並びに各種情報の収集、分析を行い、個体群の遺伝的多様性と動態を把握するため、毎年全国のキリン飼育園館にアンケート調査を実施して各年毎の血統登録書を発行していた。しかし、2008 年からは管理種となり、血統登録書の発行だけではなく、飼育繁殖技術及び施設等の調査研究を行い、個体情報等の登録並びに各種情報の収集、分析に基づいて個体群管理を実施する必要がある種となった。

まず、キリン情報の共有化と管理技術の平準化を進めていくための柱として JAZA キリン飼育管理マニュアルの作成を目標に掲げ、そのお手本とするため、すでに 2006 年に発刊され広く活用されている欧州動物園水族館協会（EAZA）の「Husbandry and Management Guidelines for *Giraffa Camelopardalis*」を分担翻訳し 2010 年に発行した。翌 2011 年には岐阜大学応用生物科学部との共同研究で、飼育キリンの適正な飼養管理を行うにあたり基本データともいえる「キリンの繁殖生理状態に関する全国調査」を実施した。また、キリンの事故事例をまとめた報告集を作成し未然に事故を防ぐために活用した。2016 年には「給餌に関する調査」を行い、上記の 2010 年キリン EAZA 飼育管理ガイドライン日本語訳発行後にエサの内容の変更点や嗜好性を調べた。2017 年には「突然死症候群（定義：外傷など起立不能に陥る原因などがなく、突然の起立不能から死亡する症例）」に関する調査を行い、エサを変えたことと突然死との関係があるかどうか調査した。2018 年には「飼育環境及び施設調査」を行い、この結果をもとに「キリン適正施設ガイドライン」を発行した。2019 年には「トレーニング調査」を行い、蹄の管理方法や採血データの蓄積から得られた知見を共有した。2020 年には再度岐阜大学応用生物科学部と「キリンの繁殖生理と栄養管理に関する調査」を行い、国内飼育キリンの繁殖生理状態と栄養管理の実態を前回の調査と比較することで、10 年もの間に多くの変化と改善があったことが明らかになった。

また、血統登録データをもとに PMx（個体群管理ソフト）を使い、現在の個体群の正確な状況を把握し、最適なペアの形成、遺伝学・個体群統計学などをもとにした中長期的な管理計画の立案、将来予測などを行い、安定した個体群の形成を目指している。

公演 5 野生のキリンのくらしと、そこから見える保全のありかた

齋藤美保（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教）

キリンは離合集散型社会を形成し、その社会でみられる様々な集団タイプ、例えばオトナのオスとメスの双方が含まれる集団や、ワカオスだけで形成される集団のメンバーは、数時間から数日で変わることが知られている。この様子からキリンの社会は、個体間の強固な結びつきではなく、個体間の緩やかな結びつきから成り立っているといわれてきた。一方当該社会では、仔育て集団（crèche あるいは nursery group）とよばれる、複数の母仔ペアからなる集団も形成される。この集団のメンバーは半年ほどにわたって大きく変わることがないとされ、緩やかな結びつきからなるキリンの離合集散型社会において「特異」な存在ともいえる。その特異な集団が形成される理由を解き明かすことは、彼らの社会構造をこれまでとは異なる側面から理解するだけにとどまらず、彼らの環境への適応能力を解明するうえでの一助となる可能性がある。しかし、当該集団の形成過程や、当該集団形成前後における構成個体の関係性の变化など、当該集団にかかわる個体の社会関係や環境とのかかわりを詳細に追跡した研究は少ない。

発表者は、タンザニアのカタヴィ国立公園に生息するマサイキリンを対象に、2010 年から約 3 年間調査を行ってきた。今回の発表では、キリンの「くらし」を形成する様々な要素の中から、彼らの「社会」、特に仔育て集団に焦点をあてる。当該集団内部における個体間関係の変化を明らかにしたうえで、当該集団が形成される背景について、生息環境とのかかわりも踏まえながら考察する。

キリンは IUCN レッドリストに VU（絶滅危惧Ⅱ類）として、そして発表者の調査対象であるマサイキリンは EN（絶滅危惧ⅠB 類）として登録されており（2024 年 4 月講演当時）、年々その数を減らしている。そのような傾向のなかで、繁殖にかかわる重要な一過程である「仔育て」について理解を深めることは、彼らの行動生態を理解するだけでなく、彼らを保全する上でも重要である。2014 年以降、生息域内での生息頭数回復を目的として、キリンをある地域からより環境が豊かだと判断された他地域へと移動させる大規模プロジェクトがアフリカ各地で実施されてきた。本発表の最後には、金銭面でも労働力面でも大きなエフォートが必要不可欠であるそのようなプロジェクトの取り組みを紹介すると共に、そのようなプロジェクトへの本研究の貢献の可能性についてもあわせて発表する。

V. 研究

1. 茨城県神栖市におけるカンムリウミスズメ (*Synthliboramphus wumizusume*) 幼鳥の漂着記録

鈴木遼太郎^{※1}, 廣瀬光子^{※2}

^{※1} 日本獣医生命科学大学 大学院獣医生命科学研究科 獣医保健看護学専攻 博士後期課程

^{※2} 日本獣医生命科学大学附属博物館

カンムリウミスズメ (*Synthliboramphus wumizusume*: チドリ目ウミスズメ科) は、西部北太平洋の洋上に生息する小型の海鳥である。本種の繁殖分布域は日本列島の周辺に局限され、日本海、太平洋、東シナ海の離島や岩礁において繁殖が確認されている（日本鳥学会, 2024）。近年は、繁殖地への無秩序な人の立ち入り、外来ネズミ類やハシブトガラス (*Corvus macrorhynchos*) の食害などに起因する繁殖地の消失が各地で確認され（山本, 2010）、個体数の減少が懸念されていることから、絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドリスト）に指定されている。

関東地方周辺では、神子元島および伊豆諸島の新島、早島、祇苗島、恩馳島、大野原島、元根、小池根、八丈小島、鳥島、鶴渡根島において、本種の繁殖地が確認されている（日本鳥学会, 2024）。特に、伊豆諸島海域の推定生息数は 1000 羽以上と推定され、国内でも最大級の繁殖地であることが知られている（日本野鳥の会, 2012）。伊豆諸島の繁殖集団の場合、5 月上旬～中旬に孵化した幼鳥は、生後 1～2 日後に海上に移動し、親鳥から給餌を受けながら洋上で成長する（山本, 2010）。ジオロケータを用いた追跡により、神子元島で繁殖した個体は、夏～秋に本州に沿って太平洋を北上し、北海道周辺海域（オホーツク海、太平洋）に到達して越冬することが明らかにされている（日本野鳥の会, 2020）。関東地方の太平洋沿岸域では、初夏の時期に海上を移動する家族群が観察されていることから（奴賀ほか, 2004; 藤田, 2008）、千葉県のアノ・外房地域は本種の移動経路上に位置すると考えられる。千葉県沿岸を通過した個体は、北上の経路として三陸～常磐沖の海域を利用することが予想され、実際に三陸沖・茨城県沿岸部では成鳥の目撃や死体回収例が存在する（日本野鳥の会, 2010; 水井元太, 私信）。しかしながら、茨城県では家族群や幼鳥の観察例はこれまでにない（佐野拓哉, 私信）。今回、著者らは茨城県神栖市の海岸において、カンムリウミスズメの幼鳥の漂着死体を確認したため報告する。

なお、本報告に用いられたカンムリウミスズメの死体（冷凍）、大胸筋組織（冷凍）、ハジラミ（70%エタノール液浸）は、いずれも日本獣医生命科学大学附属博物館に保存されている（登録番号：NVLUM-A-0069）。

【記録】

(1) 漂着個体の発見状況

2024 年 5 月 3 日、茨城県神栖市波崎（緯度 35 度、経度 140 度付近）、波崎新港から海岸沿いに北西方向に約 2km の砂浜上において鳥類の死体（以降、本個体）を拾得した（拾得者：廣瀬光子）。

神栖市の当日午後 13 時の天候は晴れ，風向は南南東，風速 4.0～6.0 m/s，潮回りは長潮であり，最満潮時間から 50 分後であった．発見地点は，汀線から 5m 程度，内陸側に位置した砂浜上であり，周辺に植生等は見られなかった．拾得個体はビニール袋に入れ，常温で輸送後，当日中に冷凍庫で保存した．なお，同日には周辺地域で本個体に加え，オオミズナギドリ（*Calonectris leucomelas*）ほか，ミズナギドリ類の多数の漂着が確認された．

（2）形態観察・外部測定・サンプリング

本個体を常温で解凍し，形態観察・外部測定を行った（観察・計測者：鈴木遼太郎）．同時に，解剖用ハサミを用いて大胸筋を少量採材し，遺伝子検査まで冷凍保管（ -20°C ）した．

本個体は，全身がダウン状の綿羽で覆われており，明瞭な羽軸をもつ風切羽，雨覆，尾羽等は確認できなかった．背面の羽毛は青灰色，喉下および腹面の羽毛は白色であった．嘴は黒色，円錐状であり，上嘴背側に管鼻が存在した．また，翼は両側ともに未発達であり，風切羽の伸長は確認できなかった．跗蹠および脚先は黒色で，趾間に発達した蹠は全蹠足の特徴を有していた．外部計測値は，以下の通りであった．全長 113 mm，尾長 15 mm，自然翼長（左）26 mm，（右）25 mm，翼開長（左）46 mm，（右）48 mm，全頭長 36 mm，全嘴峰長 21 mm，露出嘴峰長 17 mm，嘴高（鼻腔前）6.0 mm，（鼻腔後）6.5 mm，嘴幅（鼻腔前）2.0 mm，（鼻腔後）3.5 mm．なお，本個体は，胸部にスカベンジングが原因と推定される裂孔が存在したため，全長の測定値は参考程度に留めておきたい．

全身を覆う綿羽，羽色，管鼻および全蹠足の存在，および外部計測値から，本個体をチドリ目，ウミスズメ科，ウミスズメ属の幼鳥と同定した．日本国内では 2 種のウミスズメ属（ウミスズメ [*Synthliboramphus antiquus*]，カンムリウミスズメ）が繁殖するが，このうち関東地方以南で繁殖が確認されている種はカンムリウミスズメのみである（日本鳥学会，2024）．しかしながら，死亡個体の形態のみでは 2 種の識別はできなかった．岩見ほか（2016）には，繁殖地で拾得されたカンムリウミスズメ幼鳥（孵化後間もないと推測される）の外部計測値が記載されている．記載された計測値と比較し，本個体の計測値は全長・翼長がそれぞれ 3 mm 短く，全頭長が 2 mm 大きく，露出嘴峰長・全嘴峰長がそれぞれ 7 mm 大きかった．本個体は，巣立ち間もない個体と比較し，嘴がやや大型であるものの，それ以外の部位はおおむね一致した．このため，本個体は巣立ち後間もない幼鳥であると考えられる．

外貌の肉眼観察では，死因に関係しうる病変等は確認されなかった．前述したように，本個体の胸部には裂孔が存在するが，周囲の羽毛に血液等の付着がなく，死後にカラスなどのスカベンジャーがつついたことにより形成されたと考えられた．キールスコアは胸筋付近の損傷のため判定不能であったが，又骨間の脂肪蓄積量は 1 と判定された．なお，本個体の体表にはハジラミ類の寄生が確認され，これらについては得られた 4 個体を 70% エタノールで固定し，液浸標本とした．

（3）遺伝子検査

サンプリングした大胸筋由来の DNA を用いて，遺伝子による種同定を実施した（検査担当者：鈴木遼太郎）．保存した筋組織から少量を抽出してホモジナイズし，QIAamp DNA Mini Kit（QIAGEN）を用いて DNA を抽出した．PCR には，鳥類の DNA バーコーディングに一般的に使

用される、ミトコンドリア DNA CytB 領域を増幅可能な L6697Bird, H7390Thrush（岩見ほか 2016）のプライマーを使用した。実験条件は、Hebert et al.（2004）に準拠した。PCR を実施後にアガロースゲル電気泳動（100v 30 分）を行い、目的長の DNA 断片の増幅を確認した。増幅された DNA は Gel Cleanup Kit（QIAGEN）を用いて精製後、（株）ユーロフィンに委託してダイレクトシーケンスを行った。

決定した塩基配列を Bold system ver. 4（Ratnasingham et al., 2024 ; <https://v4.boldsystems.org/>）で相同性解析に供した結果、カンムリウミスズメ（*Synthliboramphus wumizusume*）の登録配列と最大 99.83%の相同性を有することが確認された。また、同システムにより構築された分子系統樹により、本個体が既知のカンムリウミスズメの塩基配列と同一のクラスターを形成し、ウミスズメ科の他種とは明瞭に区別されることが示された。以上の結果から、本個体をカンムリウミスズメと同定した。

【考察】

本個体は、形態観察・外部測定・遺伝子検査により、カンムリウミスズメの幼鳥であると同定された。本種は、茨城県では不定期な旅鳥とされており（日本鳥学会, 2024）、幼鳥はこれまでに記録されていない（佐野拓哉, 私信）。千葉県における家族群の記録は 5 月に集中していることから（奴賀ほか, 2004; 藤田, 2008）、関東地方太平洋岸の沿岸域はこの時期にカンムリウミスズメ家族群の移動経路となっていることが示唆される。本個体はその移動途中で死亡し、海岸に漂着したものと考えられる。

茨城県内にはカンムリウミスズメの繁殖地は存在しないことから、本個体は他地域の繁殖地から移動中の個体であったと推定される。伊豆諸島における本種の孵化時期（5 月）と本個体の拾得日は重なっており、羽毛の成長状況から本個体は孵化後間もないと推定されること考慮すると、本個体は茨城県から最も近い伊豆諸島の繁殖地で孵化した個体である可能性がある。

近縁種のウミスズメの場合、生後 2~3 日で海上に移動した幼鳥は、親鳥と共に半日間で 20~40 km 移動することが報告されている（Gaston and Joves, 1998）。そこで、新島（回収地点から最も近距離の繁殖地）と波崎海水浴場間の距離を Google maps を用いて計測した結果、海上のみを通る最短距離は 219 km であった。カンムリウミスズメの移動能力がウミスズメと同程度と仮定した場合、新島から銚子沖まで 3 日程度で移動する能力を持つと考えられる。また、本種の北上経路は黒潮の流路に沿っていることから、常磐沖までは潮流を利用して移動している可能性がある。2024 年の 5 月上旬には、千葉県外房沖の黒潮の流速は 2.0~4.9 ノット（時速 3.7~9.1 km）であった（海上保安庁海洋情報部, 2024）。粗い推定ではあるが、カンムリウミスズメが最高速度の黒潮に流されて移動した場合、新島から銚子沖まで 24 時間程度で到達することが可能である。

拾得日の前 1 週間の気象・波浪について分析したところ、連なった 2 つの低気圧の影響で、4 月 29 日から 30 日にかけて、南南東からの 15m/s ほどの強風と最大 2.7m の高波など、気象条件の悪化が確認された。このため、本個体が死亡した原因に気象が関与していた可能性もある。本個体の又骨間脂肪蓄積量は低いレベルであったことから、死亡前に栄養状態が悪化していたことが示唆される。何らかの理由で親鳥からの給餌が受けられなくなった結果、飢餓により衰弱し、死亡

前後に海岸に漂着したものと推察される。

カンムリウミスズメの初期生活史に関しては、孵化後のほとんどの時間を洋上で過ごすことから不明な部分が多く、今後の研究の進展が期待される。本個体はスカベンジングを受けていたものの、全身組織の状態はおおむね良好であったことから、組織や羽毛を用いた化学分析等に利用できる可能性を秘めている。安定同位体比を分析することにより、幼鳥の食性に関して新たな知見が得られる可能性がある。また、重金属や合成化学物質等の蓄積状況を測定し、環境汚染物質の生体蓄積に関する知見が得られるかもしれない。カンムリウミスズメの標本保管数は国内でも147点と少なく（サイエンスミュージアムネット, 2025年7月17日閲覧）、かつ本個体は冷凍保管のため多くの研究に活用可能であることから、今後も適切な環境で保管を継続し、さらなる研究に活用されることが望まれる。

【謝辞】

日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科 応用部門 病態病理学研究分野の山本昌美先生には、遺伝子検査の実施にあたり、施設および実験機器の利用の許可を頂きました。日本獣医生命科学大学附属博物館の石井奈穂美学芸員には、研究にあたり資料の貸し出しを許諾頂きました。また、ミュージアムパーク茨城県立博物館の佐野拓哉学芸員、水井元太氏には茨城県におけるカンムリウミスズメの記録について、貴重な情報を教えて頂きました。厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 岩見恭子, 阿部優子, 水田 拓, 染谷さやか, 西海 功. 2016. 鹿児島県奄美大島の海岸に漂着したカンムリウミスズメ雛. 日本鳥学会誌 65 (2) :181-185
- 海上保安庁海洋情報部. 2024. 海洋速報: 2024年5月6日の海況. 令和6年5月7日第82号
サイエンスミュージアムネット <https://science-net.kahaku.go.jp/> (2025年7月17日閲覧)
- 奴賀俊光, 桑原和之, 乃一哲久, 羽賀秀樹, 竹田伸一. 2004. 千葉県周辺海域における繁殖期のカンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の観察記録. 山階鳥類学雑誌 36: 93-96
- 日本鳥学会. 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会 東京
- 日本野鳥の会. 2010. 黒潮便り(15). 野鳥 747: 16
- 日本野鳥の会. 2012. カンムリウミスズメ保護プロジェクト. 2011年事業報告. 公益財団法人日本野鳥の会 東京
- 日本野鳥の会. 2020. 公益財団法人日本野鳥の会 カンムリウミスズメ保護事業. 2018年度活動報告書. 公益財団法人日本野鳥の会保全プロジェクト推進室 東京
- 藤田健一郎. 2008. 千葉県館山市沿岸で観察されたカンムリウミスズメの雛. 山階鳥類学雑誌 40: 53-55
- 山本 裕. 2010. カンムリウミスズメ. バードリサーチ生態図鑑 Bird Reserch News 7 (9) : 4-5
- Gaston A. J., Jones I. L. 1998. The Auks. Oxford; Oxford University Press: 349pp.
- Hebert P. N.D., Stoekle M. Y., Zemplak T. S., Francis C.M. 2004. Identification of birds through

DNA barcodes. PLoS Biology 10: 1657–1663

Ratnasingham S., Wei C., Chan D., Agda J., Agda J., Ballesteros-Mejia L., Ait Boutou H., El Bastami Z. M., Ma E., Manjunath R., Rea D., Ho C., Telfer A., McKeowan J., Rahulan M., Steinke C., Dorsheimer J., Milton M., Hebert P. D. N. 2024 BOLD v4: A Centralized Bioinformatics Platform for DNA-Based Biodiversity Data. In DNA Barcoding: Methods and Protocols, pp. 403-441. Chapter 26. New York, NY: Springer US.

日本獣医生命科学大学附属博物館年報 2024（令和6）年度

発行年	2026 年 3 月 31 日
編集・発行	日本獣医生命科学大学附属博物館 〒180-8602 東京都武蔵野市境南町 1 丁目 7 番 1 号 Tel 0422-31-4151（代）
印刷責任者	ラクスル株式会社 〒106-0041 東京都港区麻布台一丁目 3 番 1 号 麻布台ヒルズ 森 JP タワー19 階
